で運ふのに、何うして來たかは問題ですが、ある技師の說によれば、昆布を敷いて運んだのだらうと云ふ事です、しかしこれは研究して見たら面白いでせう」と大佐の方が仰有つた、淀君秀頼最後の所には若い松が植つていた、この城は全く涙の城である、桐の葉を渡る風も、人生の歌をうたつて居る樣にきこえる、哀しい調子で。

心齋橋通りは、五日の旅に疲れた私達が、急ぎ足に通つたのを、大阪の人々は何んな目で、見て居たゞらう。

朝陽軒で御馳走をいたゞいて、かめやについたのは九時頃、疲れた足を引づつて、なほも御みやげを增す、京都の言葉も大分解る樣になつてきた。

最後の日

石山寺で、源氏の間といふのを見た、狹い暗い所である、おだやかな琵琶湖の上を、舟で横ぎつて三井寺にのぼつた、誰もいない松の林の中で、木の株に腰をかけて、昔の「寺」といふものを、考えて見た、「叡山」「僧兵」すべての物は、夢の樣に消えていつてしまつた、けれ共まだこの寺の、何所にもまつはりついて居る、今まで私共が見て來たすべての物は、皆重々しい調子で、私共をして仰がしめた、私共をして喜ばしめた、又泣かせた、泣くのもよい笑ふのもよい、仰ぐのも嬉しい、私共はこういふすべての物を、ジーッと考へて見た時に、そこに私共のいのちの眼はもつと深くを見、もつと賢くなり、もつと貴くなつたのを、覺らずには居られない。

鐘の說明に、お腹の皮をよぢつて山をおりた、もう歸るのだ。

旅は樂しい、先生と、へだてのない友達と、一行に何の重荷もなく、かうして貴い知識をあつめ、人情の一端をうかゞつて歩くといふ事は、百冊の書もなほ及びつかない物がある。

連日御世話下された、皆樣の御見送りをうけて、しづかに雨がふり出して、如何にも舊都といふ感じのする京都を去つた。大津では大きな雷がなつた、夜は思ひ〳〵に休んで、昇る朝日と共に輝いて居る希望を以つて、なつかしい心地よい東京の土を踏んだ、電車は活潑に走つて居る、やつぱり東京はなつ

かしい。

附、五月廿四日慰勞會席上に於いて、披露せられたる物の一端。

ふき出しさうであつた事、

右は堪慶、左は運慶、何れも左甚五郎の作、

「○○さん、傘がころびました」「大けに」

女はんが靴をはいていやはる、(京都にて)

女中「これは濡れとりますな、旦那はん」(二見にて)

赤毛布にくるまつたお婆さん、汽車の窓から半分はみ出され乍ら、「おーい〳〵、汽車の番頭はん、番頭はん」

「この石の器は何ですか」小僧「これはお茶室には附きものーッ」……(後は居寢り)(金閣寺にて)

逗子へ

六月二日　郊遊會　掲示が出てから、生徒一同の歡喜は例へるものもない位だ、その日は天氣清朗、朝七時十五分までに、全校生徒は四百六十五名、雲の如く東京驛頭に參集した。御引率の先生は、文科は、

文四。下村先生、齋藤先生、垣內先生、
文三。關根先生、西村先生、中島先生、
文二。細田先生、高橋先生、竹田先生、
文一。下田先生、

午前七時四十五分に特別仕立の列車で出發した。文四は文三と、文二は文一と函を同じうし、各先生を擁して、中々に盛んな有樣である。遠足には珍らしい關根先生が、前日の固いお約束にも拘はらず見えないので、一方ならず氣を揉んで居ると、皆乘込んでから大分して、お姿が見えたので破れる樣な喝采があつた。誰かが厚い座蒲團を、態々用意して來たのなどが差し上げられる。汽車が進行し出すと、方々で話聲や笑聲や歌聲が、間斷なく湧き起る。四年の中央に座を占められた、吉田(熊次)先生が時々起つて、頗る敎育倫理的な交渉を、齋藤先生や下村先生との間に始められる。窓外は滿目の綠が何處までも續いて、麥秋の爽やかな風が、快く野の薫りをもたらす。西村先生の防水靴と、關根先生の「袂落し」と云ふ古風な御持物と、吉田先生の肩に掛けら

れた望遠鏡と、そして齋藤先生の御帽子とは、深い印象となつた。校長先生もにこやかな溫顏でまわつて來られた。

逗子へ九時半に着く。輕裝の細田先生が杖を差上げて、「文二の者はこれを標的にして來よ」と多くの群の中でお呼びになつてゐる。一同は三々伍々群をなして、七八町の田舍道を養神亭に行く。ふみ心持のよい芝草の廣い庭に出ると、直ぐその先は海である。ゆるく迂曲した白砂の濱。穩やかによせて來る波、その續く深碧の大洋の果ては、うちかすむ伊豆の山、淡い空の忘れた程高く上つた處に、滲んだ樣に幽かに富士の嶺が、よく見れば見える。詩の境、神の國、夢の樣な美景だ。靑螺の樣に浮ぶ江の島、新綠鮮やかな鎌倉の山、左には森戸、長者の岬、沖に浮ぶ舟の數もなく、何と云ふ快よい平和な靜かな有樣なのであらう。

一同は荷物を養神亭に置いて渚傳ひに隨意の散策をとる。理科の人たちは沙土に坐つて貝殼の採集に餘念のない方も見受けられた。美しいパラソルの色は點々として遠くに散り、浪切不動へゆく崖の道は蟻の樣に黑い小さい人の列がつゞいてゐる。浪切不動は浪子不動と云つた方がよく解る程「不如歸」で有名となつたものである。詣でるよりは矢張り想像してゐるだけの方が賢い。何でもない樣な小さな此岩屋と小屋とに色づける浪漫の力は偉大なものだと思つた。語りつゝ逍遙する人、渚に佇んで景色を飽くまで貪る人、沙に坐して思索に耽る人、海へ入つて戯れる人、樣々の興を盡してゐた。

子供を遊ばしてゐる西洋人や支那人もある。いつもこんな處で暮す時どんな長閑な美しい心になれるだらうと羨ましく感じられる。

晝食後は一里半餘りある長者岬へと皆が隨意に出懸けた渚傳ひに波を追ひつゝ行く者もあり、よい道を歌ひ乍ら行く人もあつた。思ふさまに伸びた麥や奇麗な白い大根の花、陸に揚げた漁船や干した網や魚籠、珍らしく懷しい景色に心奪はれて疲れも覺えないのである。すみ渡つた大空に初夏の太陽は燃える樣に輝いて、單衣の襟が汗でうるほふ許りに暑さを感じる。足の弱い人は途中の峰の松の蔭に憩うてのどかに眺めに浸つてゐるうちに健脚家は長者岬の絕端の美景を賞し得て歸つて來る。二時過にはまた皆養神亭に集つて來た。「慈父さまからお菓子を下さると」校長先生から賜つた一々紙に包んだ逗子饅頭を一同に頒たれた。珍らしい形のお饅頭を賞し乍ら例の如き厚いみ情を深く味はされた。遲ればせに垣內先生も御多祥の御身を午後から態々來られたの

も嬉しかつた。惜しい時はどん〴〵經つて、三時廿分頃養神亭を出て懷しい景色を見返り勝ちに逗子驛に集らなければならなかつた。四時八分の汽車でもう歸途に就いた。何となく太陽と時計とが怨めしい樣でもあつた。

歸りの汽車の速さよ。木立と藪と寺の多い鎌倉も瞬く過ぎてひた走れば、高調した歡樂のそがひからある寂しさが次第に湧く樣だ。せめての記念にと富士の姿、波の景色の逗子の繪葉書に先生方の一筆を賜はる。それ〴〵の繪に應じて、

いつまでもみうらの海の岩波のまたまくをしき此なかめかな　正直（關根先生）

白雲の上も御國や富士の山　（下村先生）

潮干狩蟹のくすぐる足のうら　流川（下田先生）

漾々大海水　悠々遊子心　萬壽（西村先生）

漾々屋浮水　飄々躬欲仙　劍堂（細田先生）

平家の子孫はながく絕えにけり　（六代御前の墓の繪葉書に）

靑嵐長咽　田越河畔　（垣內先生）

夏の海のかろきさゝろきひろごりてふみ心地よき逗子の砂路　（垣內先生）

靑光るいさこ路ゆけば音もなく夏の逗子の海ひろかりにけり　（垣內先生）

たれかこのふじまの上に白妙のふじの高根をかきそへにけむ　正直（關根先生）

（右の歌は裏の繪の賀なり）

夏が來た、夏が來た、何處に來た、富士に來た、逗子に來た
僕に來た、蜜柑に來た、饅頭に來た、口に來た。
（垣內先生）

御挨拶

同學年度は、西村萬壽先生の御指圖の許に、私共が委員として、本會を處理してゆくことになりました、勿論私共は力一ぱいに努める積りでは御座いますが、尙皆樣方の御助言と御研究とを俟たなければなりません。かくて內外より本會の歩みを、更に確立して行き度いと希ふて居ります。

右就任の御挨拶かた〴〵本會今年度の意志を申し述べます。

大正六年六月

編輯　小山恒子　小笠原長
　　植野キヨ　倉知薰
庶務　中村たま　山口鶴江
　　沼田雪枝　石黑善
會計　河崎なつ　山內仁子
　　筒井八重　二木靜枚
　　河野ヒサ